

われる人物に対する暴力に発展するかもしれない。憎悪グループの一員になることや、身体障害者あるいは健康に問題のある人を犠牲者にしたいという気持ちを持つことは、初期の注意信号として取り扱うべきである。

⑫薬物とアルコール

薬物服用とアルコール飲用は非健康的な行動であるということ以外に、これらの飲用は自己管理能力を減退し、子供たちを加害者とし被害者としてまたはその両方として、暴力の前にさらす。

⑬非行集団との関係

反社会的な価値観と行動――例えば強請、脅威、他の生徒に対する暴力行為など――を売りものとする非行集団は生徒の間に恐怖と緊張を引き起こす。非行集団に影響された（張り合ったり真似したり、それに参加する）青少年は、ある種の状況の下でこれらの価値観を取り入れ、暴力的・攻撃的行動に出るかもしれない。非行集団がらみの暴力やなわばり争いは薬物服用と関係することがあり、しばしば傷害・殺人事件の結末となる。

⑭火器への接近、火器の不法所持と使用

火器を不法所持しまたは火器に接近できる青少年には暴力の危険性が大きい。調査研究によると、これらの青少年は暴力の犠牲者になる可能性も高いという。家庭では、子供が火器や他の武器に接近することを監視し、制限し、監督することで子供の火器への不法接近と不法所持を減らすことができる。攻撃性、衝動性、その他の精神的問題の記録のある子供には火器や他の武器への接近を許すべきでない。

⑮深刻な暴力の脅威

根拠のない脅威は挫折感（フラストレーション）に対する普通の反応である。しかし、詳細かつ具体的な暴力を予告する脅威は、青少年が自身または他人に対して危険な行動を実行するかもしれないことを示す信頼性の高い指標である。全米各地で発生した最近の事件は、自身または他人に対する暴力行為の脅威があった場合はそれを極めて深刻に受け止めるべきことを明確に示している。これらの脅威の実体を理解し、その実行前に暴力を予防するための必要な処置をとらねばならない。

1-3-5 切迫した注意信号の認識と対応「安」

初期の注意信号とは異なり切迫した注意信号は「ある生徒が自身または他人にとって危険の可能性のある行動を間もなく実行する」という信号である。切迫した注意信号に対しては迅速な対応が必要である。

単一の注意信号だけでは危険行為が発生すると予言できない。そうではなく、切迫した注意信号とは、仲間、学校職員その他の人物に向けられた、公然とした深刻で敵意のある一連の行動または脅威として現れるのが通常である。また切迫した注意信号は、普通、複数

の学校職員並びに信号を発した子供の家族にも明らかに認識できる。

切迫した注意信号は次の通り。

- ・ 仲間や家族との深刻な身体的闘争
- ・ 財産・物権の深刻な破壊
- ・ 些細なことに対する激しい怒り
- ・ 詳細にわたる致死的暴力の脅威
- ・ 火器・武器の所持または使用
- ・ その他、自身に対する傷害的行動や自殺の脅威

注意信号が差し迫った危険を指摘している場合、安全に対して常に最優先で最大の考慮が払われねばならない。迅速に行動する。学校当局による迅速な指導・介入、並びに子供が下記の状況にあるときは、多分、法執行官の指導・介入も必要となる。

・ 子供が他人を傷つけまたは殺すための詳細な計画（時間、場所、方法）を表しているとき。特にその子供の過去に攻撃歴または脅威歴があるとき。

・ 子供が武器、特に火器を携行するか、その使用を脅威しているとき。

生徒が脅威的行動に出ているときは、両親にその事件を直ちに報せなければならない。学校コミュニティは、家庭・少年局並びにコミュニティの精神衛生部局などの関係機関から援助を求める責任がある。これらの対応は学校当局の方針を反映し暴力予防対応計画に合致するものでなければならない。

1-3-6 脅威とは何か「発」

脅威とは誰かに対して損害を与えまたは暴力を及ぼそうとする意図の表明である。脅威は口頭、文書または抽象的な行為——たとえば手であたかも誰かに発砲するような動作——の何れかで表明される。

脅威評価は二つの重要な原則に基づく。第1は全ての脅威や脅威者は同じではないこと、第2はほとんどの脅威者はその脅威を実行することはないこと、である。しかし全ての脅威は深刻に受け止め評価する必要がある。

全米暴力分析センターの経験によると、大部分の脅威は無名または偽名で行われるという。しかし、脅威の評価は脅威者の背景、個性、生活スタイル及び資源を評価することに大きく依存しているので、脅威者を認識することは情報に基づく脅威の評価を行う上で非常に重要である。また脅威が深刻で告訴せねばならないようであれば、刑事訴訟を起こすためにも脅威者を認識することが必要である。もし脅威者の身元が明らかにならない場合は、その対応は脅威の評価のみに依存せざるを得ない。脅威の評価も脅威者が特定されれば変わるかもしれない。もし追加情報によって脅威者が危険人物であるとなった場合、リスクが低いと見られていた脅威を高リスク脅威に評価替えせねばならないかもしれない。それとは逆に、高リスクと区分されている脅威も、もし脅威者の身元が明らかになりその人物に脅威を実行するだけの意図、能力、手段、あるいは動機が見あたらないときは、その脅

威の危険度は引き下げられることになるだろう。

1-3-7 脅威の形態「発」

脅威は、直接、間接、ベールをかぶせる、あるいは条件付きの4種に区分できる。

- 直接的脅威：具体的な目標に対して具体的な行為を指定し、率直・明確でかつ明白に伝えられる。例えば、「俺は学校の体育館に爆弾を仕掛けるつもりだ。」
- 間接的脅威：ぼやっと明確でない、しかも曖昧な表現。計画、目標犠牲者、動機その他の脅威の諸要素が曖昧である。例えば「そのつもりになったら、俺はこの学校の全員を殺すことができるかもしれないぞ。」暴力が暗示されているが、暴力の表現は「そのつもりになったら」とためらいがちである。暴力は「起きるかもしれない」と暗示しているが「起きるぞ」とはっていない。
- ベールをかぶった脅威：強く感じられるが明確に表明されていない脅威。例えば、「お前が周りであらうろしなかったら、俺は気分が良いぞ。」この表現は明らかに暴力行為の可能性を示唆しているが、そのメッセージの解釈を犠牲者になるかもしれない人物に任せ、しかも脅威の決定的な意味を伝えている。
- 条件的脅威：この種の脅威は金品を強要する場合にしばしば見受けられる。ここではある要求や条件が満足されないときは暴行が行われると警告する。例えば「もし百万ドルを支払わないのなら、学校に爆弾を仕掛けるぞ。」

1-3-8 脅威評価とは「発」

脅威評価 (threat assessment) とは二つの問題に対して情報に基づく判断を行おうとするものである。その問題は第1に「その脅威そのものはどの程度実現性があり深刻であるか」、第2に「脅威者はその脅威を実行するためにどの程度の資源(金銭、道具、武器など)、意図や動機を持っているのか」ということである。

1-3-9 脅威評価に当たっての諸要素「発」

①具体的かつもっとも詳しい詳細

この要素は脅威を評価するに当たって最も重要な要素である。その細部項目の中には、犠牲者の身元、脅威の原因、手段、武器、並びに実行の方法、実行日時、脅威行為が実行される場所、並びに既に実行されている計画または準備に関する具体的な情報などが含まれる。

詳細が具体的であれば検討、計画、準備が十分に行われていること、及び脅威者は脅威をやり通すだろうという高リスクが示唆される。他方で、脅威内容の詳細が欠けている場合は、脅威者は偶発段階を含めた全過程を十分に検討していない、脅威を進める段取りをまだ開始していない、あるいは暴力の実行を深刻には考えていないが何らかの欲求不満に対する感情のガス抜きをしたい、特定の犠牲者を威し驚かせたい、あるいは学校の特定行事

や日常行事を邪魔したいなどの場合が考えられる。

具体的だが論理的ではないかもっともらしさに欠ける脅威は、その脅威の深刻度が少ないことを示唆しているのかもしれない。例えばある高校生が「翌日の昼食時間に学校の講堂を数百ポンドのプルトニウムで爆破するつもりだ。」との脅迫状を送りつけた。この脅迫状には詳細が記され、時間、場所、及び武器が具体的に述べられている。しかしこの詳細には説得性がない。プルトニウムは正規市場でも闇市場でも入手できる可能性がない。高価で運搬が難しい。操作は危険で、核反応を引き起こすには複雑な起爆装置が必要である。高校生がプルトニウムを入手しうる可能性はもともとないが、それを数百ポンドも入手することは不可能である。その生徒はプルトニウムを起爆するための知識も複雑な装置も持っていないだろう。このような非現実的な脅威が実行されることは明らかにあり得ない。

②脅威の感情的な表現

感情的な表現は脅威者の精神状態を知る重要な手がかりとなる。感情はメロドラマ的な用語や記号の異常な使い方と伝えられる。たとえば「お前は嫌いだ!!!!!!」、「お前は俺の人生を台無しにした!!!!!!」、「神のお恵みを!!!!!!」などのように興奮したあるいは支離滅裂な文章や、神や宗教的存在または最後通牒的文章がこれに当たる。

感情的な脅威は評価者に脅威者の気質に関する情報を提供するが、それは脅威の危険度の尺度になるわけではない。感情的な脅威は恐ろしく感じられるが、脅威に示される感情の激しさとその脅威がもたらす危険度との間には何の相関関係も見られていない。

③事件促進圧力 (Precipitating Stressor)

事件、環境、反動、状況などは事件の発生を促進する圧力となりうる。促進圧力は一見したところ無意味で脅威と直接の関係がないように見えるが、それにもかかわらずそれは触媒になることがある。例えば、生徒が登校前に母親と口論した。口論の理由は学校と何の関係もない些細なことであっただろう。しかしそれが感情的な連鎖反応を引き起こし、その日、学校で他の生徒への脅威となる結果に繋がってしまった。(それはおそらく彼が過去において考えていたことかもしれないが。)

促進圧力の衝撃は明らかに”性向要因 (Predisposing Factors)” に深く関係している。性向要因とは個人の底流にある性向、性格、気質などで、青少年を暴力や暴力的行為の幻想に傾かせる気質である。従って暴力の”引き金”に関する情報分析では、失敗や意気消沈に対する生徒の弱さなど、底流に流れるこれら性向要因を広範に取り上げて検討する必要がある。

1-3-10 リスクのレベル「発」

低レベルの脅威：犠牲者や公衆の安全に最小の危機しか持ち込まない脅威。

- ・脅威は曖昧で間接的。
- ・脅威に含まれる情報は首尾一貫せず、詳細に欠けるか尤もらしくない。